HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	クラウス・バウムゲルトナー(編)：「言語行為」
Author(s)	植木, 迪子
Citation	独語独文学科研究年報, 5, 99-102
Issue Date	1979-02
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25532
Type	departmental bulletin paper
File Information	5_P99-102.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

書評：クラウス・バウムゲルトナー（編）
「言語行為」

植木迪子

生成変形文法理論が、西独のゲルマニストの間で研究されるようになったのは、１９６０年代の半ば以降である。それは、チョムスキーの「文法の構造」からほぼ１０年を経過し、「文法理論の諸相」の刊行と時を同じくしている。その後、それは、科学としての言語学に対する期待とあいまって、数年を経ずして著しい進展をとげた。しかし、この言語能力の解明とその体系的記述に重点をおく言語理論に対する批判もまた、より総合的な言語の把握を目指す立場からなされはじめた。その緒となるものは、ヴンダーリッヒの「言語学における実用論の役割」（１９７０）であろう。それは、チョムスキーが、さしあたっては言語理論の対象として扱わないとした言語運用にこそ、言語の本質を見ようとするものであった。この考え方を支えるものとして、バーンスタインの社会階層によるコードの理論、ヴィトゲンシュタインの使用意味論、オースチンの発話行為理論、ハーバマースのコミュニケーション能力論などが参照にされ、その後さらに、ゲームの理論や行為理論の研究もとり入れられるに至った。そうして、この方面の研究は、最近の西独でますます広がりをみせている。ここでは、その研究の多様性の一断面を示すものとして本書をとりあげてみた。

本書は、１９７６年にデュッセルドルフで開催された独文学会の分科会「言語行為 — 共時論的および通時論的視点より —」において発表された四報告に、それらと関連の深い一論文を加えたものである。夫々の発表者と題目は以下の通りである。

Rudi Keller: Verstehen wir, was ein Sprecher meint, oder was ein Ausdruck bedeutet? Zu einer Hermeneutik des Handelns.

Gisela Harras: Handlungen begründen. Zur Entwicklung eines gemeinen Handlungskonzepts im Hinblick auf Begründungsmöglichkeiten von Handlungen.

Gerd Fritz: Strategische Maximen für sprachliche Interaktion.

Manfred Geier, Gisbert Keseling, Marianne Nehrkorn, Ulrich Schmitz: Zum Beispiel: Argumentieren. Ein Beitrag zum Verhältnis von synchroner, ontgenetischer und historischer Rekonstruktion.

Hans Ramge: Zur sprachwissenschaftlichen Analyse von Alltagsgesprächen.

以下、夫々について簡単な紹介を試みるが、紙面の都合上、ケラー論文について他の諸論文にも共通する考察をいくらか詳しく紹介し、他の四論文では夫々の重点に限ることとする。

ケラーは、コミュニケーションを、相手の理解を得るための相互協力ゲームであると設定したうえで、彼の論文の目的を「そのゲームの構造と、そのゲームで使われる手筋（Zug）の解明」（２頁）としている。それは、言語行為における理解の概念（Verstehensbegriff）の解明ということになろう。行為理論において、コミュニケーション行為を理解することは、その法則性を理解するということである。さらに、ある規則を知っているということは、「どのような状況において、どのような意図の実現を図るためには、どのような行為が最も適切であるかを知っている！（２５頁）ことを意味している。

このような諸関係の整理のためにはモデルの設定が有効である。対象についての認識を深めるために設けられる、コミュニケーション・モデルのようなモデルを、ケラーは、G．クラウスに倣って「哲学的モデル」と名付ける。次いで、モデルの有効性についての判定基準を、容認しうる（plausibel）かどうかと啓発的（lehrreich）かどうかに置いている。この立場からは、しばしば用いられる話し手のコード化を聴き手が解読するタイプのコミュニケーション・モデルでは以下の対話は扱えないとする。

B: Hast du denn die Hühner heute abend auch ordentlich gefüttert?

A: Leider nein; meine Grossmutter wird morgen achtzig.

B: Wie, das verstehe ich nicht; was meinst du denn damit?

（６頁）

この例におけるBの“verstehen”は、「相手の意図を理解する」、「言表の間に関連を見出す」という意味内容を持っており、コミュニケーション理論の核心となる問題を含むにもかかわらず、上記の単純なモデルの説明能力を超えている。つまり、このモデルはこのような性質の言語現象について、容認しうるものでも啓発的なものでもないわけである。

このような考察の後、ケラーは、コミュニケーション・ゲームの「手筋」を解明するための基本として意図の概念を導入する。ある活動（Aktivität）が行為（Handlung）であるか否かは意図（Intentionalität）の有無によって判断されるわけである。また彼はさらに、行為の成功（glücken）と行為の帰結（Folge）を区別する。彼によれば、我々は多くの場合に、ある行為の

成功そのものよりも、むしろ、意図された帰結が生じたかどうかを問題とするのである。つまり、釣に出かけて釣糸を垂れれば、釣をするという行為は成功したことになるが、しかし、魚が釣れなければ、意図した帰結の効果はなかったこととなるわけである。

このような区別を設けたうえで、ケラーはコミュニケーション行為を以下のように定義する。「ある活動Aは、以下の条件を満たす場合に限り、あるグループGにおけるコミュニケーション行為である。

(1) ある状態Zが、ある慣習Kに基づいて、活動Aと結びついていることが、グループGにおいて共通の知識となっている場合。（この時、Zは、行為者がAを行なうことによって遂行している行為の結果である。）

(2) 行為者は、状態Zが生ずることを意図する。

(3) 行為者は、相手が(1)によって(2)であると知ることを意図する。」（１２頁）

この定義において重要なのは、慣習（Konvention）を承知していることである。ある表現がわかる、ということは、それがどのような慣習に基づいて使用されているかを知っていることである。ある表現の使用法と個々の言及対象を承知していれば、聴き手は、話し手が何を言ったかがわかり、聴き手はそこから、話し手が何を意図していたかを推しはかって理解できるわけである。

ケラーが、人間の活動を「行為」に対する条件に求めようとしたのに対して、ハラスは同じ問題を別な視点から追求している。彼女の関心は行為者の知識に向けられており、この論文では「行為者が行為について何を知っているか」（２８頁）を明らかにしようと試みている。

ハラスは、行為者の行為についての知識の総体を「行為の構想（Handlungskonzept）」と名付けて、行為がどのような条件によって根拠づけられるのか、また「行為の構想」はどのようにして作られるのかを考察する。行為は、知覚できる外面と、単なる感覚与件以上のものである内的な相より成っている。我々が、他の人々の活動をみて、それが特定の行為であると判断する場合には必ず、内面と外面の一体化を想定しているし、また、行為者は、この一体化を行為によって提示するのである。我々は、いちいちそのメカニズムを意識しながら個々の行為を営んでいるわけではないので、内面の相を解明するための観察データーは、今のところ僅かしかない。しかし、「行為の構想」には必ずこの側面も明示されなくてはならない。「行為の構想」を構成する行為カテゴリーとして、ハラスは、目的、行為規範、行為手段、状況判断、状況の評価の他に、行為の目的と目的実現の意図や目的の妥当性などを結びつけるための前提をあげている。また、「行為の構想」は、全ての行為に対して適用可能なものであって、当然、コミュニケーション行為にも使えるが、このためにはいくつかの付加的テーゼが必要であるとする。

フリッツもまた、言語行為（彼は相互作用Interaktion と称しているが）をゲームとみなしている。この視点は、先にあげたゲームの理論とヴィトゲンシュタインの言語分析的行為理論におけ

る言語ゲームの双方に基づいている。分析哲学は、規則を構成的規則と統制的規則に分け、ゲームを支配するのは構成的規則であるとする。しかし、行為の目的が既に定まっており、与えられた状況下で限られた手段のうちから戦略的判断によって、ひとつを選択しなくてはならない場合には、統制的規則が言語の使用を決定することとなる。言語行為のゲームにおけるこのような戦略的原則（strategische Maximen）には、先にハラスがあげた行為のカテゴリーと同質のものが、多かれ少なかれ体系的に包含されている。

ラムゲが問題としているのも、やはり、言語による相互作用であり、彼は、日常会話の研究のために有効な方法を探ろうとする。日常会話は、常にくり返される日常的経験の再生産という特徴を有し、テキストの形態をとることによってはじめて言語学的分析の対象となる。分析のためにはモデルが必要であり、このモデルは、社会言語学的、発話行為論的、会話分析的諸要素を統合するものでなくてはならないとする。

これまでの四論文とガイヤ他の論文は、若干その視点が異なる。生成変形文法から実用論的言語理論に至るまで、現在の言語研究はおしなべて言語構造の発見とその形式化を目指しており、共時論的構造主義というパラディグマを保持し続けている、というのが彼等の言語学の現状に対する批判である。この批判から生ずる課題は、言語をふたたび社会的歴史的関連の中でとらえなおし、しかも、言語学の対象としての言語の特殊性を雲散霧消させないことである。この論文では、そのためのひとつの試みとして、具体的な学術論争の分析がなされている。ある学会における論争の抜粋をふた通りに解釈し、そのうちのいずれが妥当であるかを決定するために、研究者間の討論に特徴的な表現形式のリストを作成する。この結果、①同一の目的をもつ者の集まりとして、協力して真理の探求にあたるという要請と、②相手を凌ぐことにより研究者個人の利益を促進させる、というふたつの互いに矛盾する動機が言語表現に凝結していることが明らかとなる。このような表現を支える姿勢が、実は、個人の社会化の過程において内面化されていることを、ガイヤ他は、個体発生の各段階を追いながら説明し、さらに、このような説明の試みを、歴史的な各種の社会形態における論争の形式によって裏づけようとしている。

この巻に収められている諸論文は、西独における言語学の一傾向の現状を反映しているものとして興味深い。言語実用論、あるいは言語行為論の視点によって、言語学の拡大と、その対象の本質に迫るための研究方法の模索がなされている。この巻の諸論文に加えて、近年刊行されたコール／モルガン（編）：発話行為Speech Actsおよび、コール（編）：言語実用論Pragmatics（Academic Press 1975, 1978）の両巻所収の諸論文を参照するならば、意味論の行きづまりを打開する方向へむけての多くの示唆を得ることが可能であるかもしれない。

（Klaus Baumgärtner (Hg.): Sprachliches Handeln. Heidelberg, Quelle & Meyer, 1977）

（広島大学助教授）